

今昔物語

山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきた行橋市。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

～ Vol.030 浄喜寺

国道 10 号バイパスを金屋交差点から中津方面へ車を走らせると、左手に大きな瓦屋根をもつ建物が見えてきます。今井にある浄喜寺の本堂です。

浄喜寺は本願寺第 8 世（浄土真宗）蓮如上人の直弟子となった慶善（村上良成）が明応 4 年（1495）に今井津に開基。九州における初期の真宗寺院として、本願寺教団の教勢拡大の拠点を担い、本願寺の東西分派後も東本願寺（真宗大谷派）の直末寺として多くの末寺を擁した北部九州の名刹です。正式には「守田山雲龍閣浄喜寺」といい、地域では「じょうけいじさん」と親しまれています。

1926 年頃 / 大正 15 年頃

浄喜寺の境内

境内でひと際目立つ本堂は、江戸時代後期の文化 14 年（1817）に 9 間 4 面から 11 間 4 面の規模に建て直されました。正面の幅は 28.2 m、奥行は 24.1 m、高さは 15 m ほどで 5 階建てのビルに匹敵。県内の寺院建築でも屈指の規模を誇り、荘厳な佇まいを見せています。本堂向かって右手に玄関があり、さらに奥が庫裏となります。庫裏は 50 畳敷の広間が際立ち、行事の豪商であった飴屋玉江家から大正時代に移されたと伝わる仏壇（御内仏）の一部を備えています。本堂より古い 17 世紀中頃の建築とされます。



▲山門付近からみた今から約 100 年前の境内の様子。かつては松の大木があったが枯死したため、現在の景観とはずいぶん異なる。

2025 年 / 令和 7 年

浄喜寺で行われた「行橋連歌大会」

浄喜寺は 7 月後半から 8 月初旬に当地の今井津須佐神社を中心に執り行われる福岡県指定無形民俗文化財「今井祇園行事」（今井祇園祭）にも深い関わりがあります。

祭りの主要な神事の 1 つである「連歌奉納」では、今井の熊野神社から今井津須佐神社の拝殿に座を移し完成する「社頭連歌」、浄喜寺で始まり大祭 2 日目の今井西の山車の上下で完結する「車上連歌」の 2 巻の連歌を奉納しています。

平成 16 年（2004）、福岡県で開かれた国民文化祭では、行橋市において文芸部門ではじめて連歌大会を行ったことを機に、毎年「行橋連歌大会」を晩秋の浄喜寺を会場として実施するようになりました。



▲昨年秋で節目の 20 回を迎えた。近年は一般の方々に加え、地域の中学生、高校生の参加も目立ち、4 年後の 2030 年に迎える連歌奉納 500 年に向け、伝統の継承を図っている。

浄喜寺には、ほかにも室町時代の今井鋳物師がつくった梵鐘を吊るした鐘楼、石山合戦で織田信長と対峙した浄喜寺第三世住職の良慶上人の絵像や浄土真宗の宗祖・親鸞聖人の伝記の絵巻の掛軸、上述の連歌など、有形無形問わず貴重な文化財が今に守り伝えられています。

こうした文化財は、この地域の伝統的な文化が結実した 1 つの形で、地域の風土や歴史の理解に欠くことのできない貴重な資産ともいえます。それを次世代に継承していくことは、現代社会に生きる私たちの重要な使命の 1 つともいえるでしょう。